

糞掃衣

前永平寺副監院 山田康夫

今年四月(昭和六十二年)行われた報恩授戒会に私の大変感激した事が二つあった。その二つ共が十五條の如法衣(糞掃衣)と云うお袈裟にまつわる話である。

私はこの感動的な物語りを是非全国の皆様に紹介したいと思つて筆を執つた次第です。

◇長野 池沢さん

既に『中外日報』にも関連記事が紹介されて居るが……。今年一月、私が東京の宗務庁に所用

があり出張した時、横浜の善光寺、黒田武志師の訪問を受けた。師は「山田さん、実は私の良く存じあげている長野の池沢さんと云う方が一年半かかって縫つた十五條の『遠山如法衣』を是非永平寺の大禅師さまに献納したいと思うのですが、是非おとりもち願いたいのです」と云うお話であつた。

「それは有難い事です。早速禅師さまにお取り次ぎ致しましょう」と、この事を上月監院を通じて禅師さまにお取り次ぎいただいたのであ

る。

禅師さまは大変喜ばれて、去る四月二十一日お授戒の前に此のお袈裟をいただき御礼の証に池沢家の御先祖の供養として、「御親香施食」を御親修されたのです。そして、「この有難いお袈裟は私が戴いたと云うよりは永平寺に戴いたと思うので永く本山の重宝として残そうと思う」と仰言られた。

ところで此のお袈裟献納の為、長野県や東京方面より百名余の団参の方が見え、禅師さまのお姿を拜んで唯々感激して居られた。

その晩、池沢さん御夫妻にお目にかかった時、奥様からこのお袈裟を縫うに到った身の上話を伺って私は「一子出家すれば九族天に生ず」と云う言葉があるが、正しく之だなあと深い感銘をうけたのである。

池沢さんの次男である資剛君は中学・高校をトップクラスで卒業、上智大学経済学部を卒業

して日本アイビーエムへ入社。成績は四年間毎年トップの営業マンであったが、ある時、五十億の商談で国産のファコムに値段の点で敗れた。本人にとって大きなショックで、しばらく悩んだ末、「金も要らなきゃ物も要らぬ。俺は人の心が欲しい」と発心して、松代の長国寺に吉田興山師をたよって出家してしまった。

両親の驚き、反対も押切って出家してしまっただので、親の方があわててしまったのである。

時に昭和五十三年七月十一日、資剛君二十六歳の時であった。その年、住職吉田興山師のお授戒が勤まり、その授戒を手伝って居た池沢さんの奥さんが吉田師の師匠沢木興道老師の「十五條糞掃衣」を初めて拝見して、この衣に魅せられ、何うしても把針をしたいと発願して、愛知県一宮市の常宿寺岡本光文尼を訪ね、懇切な指導を戴いて、漸く如法衣を縫うことが出来るようになって禅師さまに献上したお袈裟が九肩

目になると言うのであった。

先ず最初の一肩を出家した吾が子紫山（得度安名）の為に針を把つたと云う。やはり母親の吾が子を思う深い親心に頭の下る思いであった。そして十肩の如法衣の把針を悲願として九肩目を大禪師さまのお袈裟に取りかかろうと思つてゐる時に思いがけなくも素晴らしい衣財の提供者が現われたのである。

元成蹊女学校校長奥田正造先生の茶道の門弟田中清氏より永平寺の禪師さまのお袈裟ならば私の恩師奥田先生より形見としていただいた、黒紋付を是非使つて欲しいと申し出られたのである。

ここで奥田正造先生の経歴を簡単に紹介すると、氏は岐阜県高山の生れ、一高より東大を卒業、成蹊女学校の校長として多くの女子を教育した。法隆寺管長佐伯胤師に師事し、仏教を背景とした茶道により婦徳の養成に志し独特の

茶道を大成して、特に道元禪師の『典座教訓』を読み深く皈依された方である。誠に最適の衣財に巡り会い、池沢みなと大姉の真心こめた深信の針に依り、一年有余の歳月を経て把針された「十五條僧伽梨遠山糞掃衣」が見事に出来上つた。

四月二十一日、本山法堂に於て禪師さま御自ら奥田先生御夫妻、池沢悦二殿、衣財提供者田中清殿各々先祖菩提の大供養が勤修されたのである。同行の約百名余の御夫人方は皆、此の先生の教え子であり、此の盛儀に参列して、恩師の衣財から成つた十五條衣をお掛けになつた禪師さまによる御供養で感激一入であつた事であろう。そこここにハンカチで涙を拭う場面が見られたのである。

池沢さんはこう述懐して居られた。

「山田老師、息子がね、出家して一番変わったのは母親であり家内ですよ。それからというも



の室内は毎朝六時に起きて仏壇で朝課を読むようになりました。『観世音菩薩普門品・般若心経・参同契・宝鏡三昧・開山歷住諷経・大悲心陀羅尼』毎日の日課にしています。そこへ行くとき親父の私はカラキシ駄目ですよ、呵々」と笑われた。然し何うして何うしてこの度の事も池沢氏の陰の力によるものが大であると思えたのである。

◇糞掃衣（正伝の仏法の証しとして）

これ程までにお袈裟が多く的心ある人々を感じせしめ、深い信仰生活に入らしめる原点は何か。それは正しく御開山道元禪師のお袈裟に対する御信仰に他ならない。

承応二年、道元禪師二十四歳の春、眞実の仏法を求めて中国に渡られ、生れて始めて見る異国の風物と文化に驚きと畏敬の念を持ち乍ら歩き廻った末、漸くにして巡り合った正師（如浄

禪師）に師事し一心に修行する中に正法に契当した。遂に正師と正法に邂逅することが出来たのである。

道元禪師はこの正師と正法との出合を殊の他有難くお感じになられ、此れは全く今生ばかりはなく前世からの善根力のお陰によるものだとお感じになって居られる。

『正法眼蔵袈裟功德』や『伝衣』の巻には、「宿善」とか宿殖般若とかの言葉がしきりに説かれている。

道元禪師が如法禪師より受けついた仏祖正伝の仏法とお考えになったものの中で、特に正法とされるものがこのお袈裟であったのである。

『袈裟功德』の巻頭に、

「仏から仏へ、祖師から祖師へ、まっすぐ伝へられた袈裟と法が、間違いなく中国へ正伝した事は嵩山の達磨大師だけである」と述べられ、お釈迦様から二十八代目の達磨大師が間違いな

く、正統としてのお袈裟と法をお伝へになった。そして、その正法が我が師如浄禪師に伝わったのであるから正しく正伝の仏法であると述べられている。

従ってお袈裟は仏様の心であり、仏様のお体であると信じられたのである。

事実、天童山で修行僧がお袈裟を頭にいたたいて「大いなるかな解脱げだうぶく、無相福田の衣、如来の教えを身につけたてまつり、広く諸々の衆生を渡さむ」と唱えて肩にかける姿（現在の永平寺の搭袈裟法）を目の当り見てただ感激して涙が止まらなかったと述べられている。

そして、このお袈裟を身につけることができれば龍も三熱地獄をまぬがれ、牛も角の先でふれただけで罪を減ずるのだと説かれている。

そのお袈裟には三種類あり、五條衣・七條衣・九條衣があり、九條衣以上を大衣と云い、大衣の中で最も清浄で尊いものは「糞掃衣」である。

糞掃と云ふのは、はきだめに捨てられたボロ布を洗って縫ったお袈裟のことでこれが最高の功德がある。何故ならば人間の欲心を捨て清浄無垢の心を育てるからである。然も、此のお袈裟を一大願心を起こして精進潔齋して一針一針真心をこめて如法に縫う時に無量の功德をいたたくことができるとお説きになっている。

何時の世でも、吾が子を思う母親の慈悲心には心うたれる。池沢みなと女史が吾が子の出家の縁によってお袈裟の尊さを知り、何時の間に常人の及ばぬ信仰の世界に入り、又多くの人々に深い感動を与えたことを尊く思うと同時にこれこそ現代に生きている仏教を痛感する次第である。

※大本山永平寺『傘松』より転載